



森 一久
(もり・かずひさ)
日本原子力産業会議
専務理事

鳩摩羅什といえは、ご承知のように紀元三五〇年ごろに生まれ、膨大な仏教の経文を中国訳した人。インドのある王族の息子で、たいへんな秀才であった。

羅什の顔

量のダイナマイトが爆発し、そしてたくさん風船が舞い上がるといった華やかな演出もあり、宗教的な色彩も無く、陽気な雰囲気、至極楽しい式典であったことが思い出される。

アメリカやヨーロッパなどのメーカーの工場の竣工式など、地域住民も多数招待され、式典というよりも楽しいショーのようで、音楽・レーザー光線を用いたり、その他の催し物など、印象深いものが多くなってきた。

世界各地の式典を眺めるのも、私にとって楽しみの一つである。

当時その名声はインドばかりでなく、中国の長安(現・西安)にまで及んだ。

そのため、長安の仏教界は羅什の来訪を待望し、中国の皇帝は彼を招くよう手を打った。

そして、羅什は長安に住居を与えられ、膨大な法華経などの訳経を生涯の仕事として行った。彼の仏教に果たした功績は大きく、唐の玄奘と並んで二大訳聖と称せられている。

実はその羅什には現在、二つの顔がある。

一つは私の菩提寺である広島の前寺で、理由はよくわからないが、黒檀材の像がある。そしてもう一つが、彼が滞在して仕事をした寺である西安郊外の草堂寺だ。しかし、十年ほど前までは広島の前寺にしかなかった。

そのため、十年前に広島の前寺の草堂寺に国前寺の木像をコピーして寄贈しようと考えた。それも、広島の前寺で焼けた、お寺の境内にある巨大な松の根でつくり、平和の祈願をこめて、草堂寺へ送ろうと考えた。それには中国の関係者も喜んで

いた。

ところが、二年ほど経ったある日、中国の関係者から、全く別の日本のグループから資金をもらって、すでに据え付けたので結構である、と言われた。これには、広島の関係者がびっくりした。

特に国前寺の住職である足田英政さんは、一体どうなっているのか、私に中国へ行く機会があったら調べてほしいと言われていた。

ちょうど五年ほど前に、私は中国の原子力に関する会合に出席する機会があり、その経緯を調べることにした。

北京から西安まで、汽車で二十六時間。やっと西安に着き、草堂寺へ詣でた。

しかし、そこに座った羅什の像を見て、私は愕然とした。「はて、この御姿は何としたこと……」と、思わずつぶやいた。

国前寺の像はどちらかというと、初老の(時に五十歳)細面の理知的で整ったお顔をしており、頭にはまげがある。しかし、草堂寺の像は、若く脂ぎった太った顔をしており、頭巾の下はツルツル。似ても似つかぬ御姿。

中国のある関係者の言によると、まげがあるのはおかしい、お坊さんはツルツルでなければいけない。この像は中国でいろいろ議論した結果つくったのだという。

これには私は納得できなかった。

『撰時抄』(日蓮)にも羅什のことが詳しく書いてあるが、羅什が長安に行き、訳経に没頭したころは、酒食をたしなみ、妻帯もし、侍女にみづかれる生活をしていた。

それを、まげがあるのはおかしいと、坊主頭にしてしまうと……。

そして北京に帰ったとき、ある人の紹介で、中国仏教界で最高の方といわれる趙僕初先生にお目にかかる機会があった。主題は「核軍縮と仏教の役割」といったことだったが、同師の温顔に接しているうち、むらむらと甘え心がわいて、厚顔にも、この二つの像の違いを、私はご説明した。

もちろん同師も、草堂寺の像のこととはご存知で、「もう一度広島に行つて、その復興ぶりをみたい。そのときにはそちらの像をぜひ拝見しよう」と和やかに答えられた。

その中国はいま混乱の中にある。あの羅什の「まげ」をとったものが、一種の教条主義でなければいいがと思ふところである。